菊川市埋蔵文化財調査報告書 第26集

池之谷横穴群１次
発掘調査報告書

2024
静岡県菊川市教育委員会

菊川市埋蔵文化財調査報告書 第26集

池之谷横穴群１次
発掘調査報告書

2024
静岡県菊川市教育委員会

例　　言

1　本書は静岡県菊川市高橋字中磯部に所在する池之谷横穴群の第１次発掘調査報告書である。

2　当発掘調査は、菊川市建設経済部建設課による市道赤土高橋線道路整備事業に伴う事前調査として、菊川市教育委員会が実施した。

3　現地発掘調査及び整理作業は、丸杉俊一郎（社会教育課　指導主事）が担当して実施した。

4　本書の執筆は、丸杉が行った。

5　本書の編集は、菊川市教育委員会が行った。

6　調査記録及び出土遺物は、すべて菊川市教育委員会が保管している。

凡　　例

1　本書で用いる座標値は、世界測地系である。方位（北）は座標北、標高は海抜高である。

2　遺物番号は、横穴墓ごとに連番を付した。

3　本書で報告する土器の断面と種別の関係は、以下のとおりである。

□ 土師器
■ 須恵器
▒ 陶磁器

4　本書で用いる横穴墓の部分名称・計測位置については、以下の文献を参考にした。

大谷宏治 2012『森町円田丘陵の横穴墓群　調査報告編』静岡県埋蔵文化財センター

5　本書で扱う出土土器の評価については、主として以下の文献を参考にした。

鈴木敏則 2004「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会

鈴木敏則 2005「出土須恵器について」『東若林遺跡』浜松市文化振興財団

6　本文中の参考文献は、各章の末尾に列記した。

池之谷横穴群１次

目　次

例言・凡例

第１章　序　　論 …… 1
1　調査経緯 …… 1
2　本発掘調査の方法と経過 …… 4

第２章　遺跡の位置と環境 …… 6
1　地理的環境 …… 6
2　歴史的環境 …… 6
3　既往の横穴墓調査 …… 8

第３章　調査成果 …… 11
1　調査対象地の概観 …… 11
2　１～３号横穴墓 …… 13
3　４号横穴墓 …… 15
4　太平洋戦争期の遺構 …… 20

第４章　総　　括 …… 21

図　　版
報告書抄録

図 版 目 次

PL. 1　1　A区調査前全景（南東から）
　　2　B区調査前全景（東から）
PL. 2　1　A区全景（南東から）
　　2　1号横穴墓（南から）
　　3　3号横穴墓（南東から）
　　4　2号横穴墓（南から）
PL. 3　1　4号横穴墓　全景（南東から）
　　2　4号横穴墓　全景（南から）
　　3　4号横穴墓　開口部（南東から）
PL. 4　1　4号横穴墓　奥壁（南東から）
　　2　4号横穴墓　前壁（奥壁側から）
　　3　4号横穴墓　左袖部（奥壁側から）
　　4　4号横穴墓　右袖部（奥壁側から）
PL. 5　4号横穴墓展開図
PL. 6　1　4号横穴墓　出土遺物（1）
　　2　4号横穴墓　出土遺物（2）

挿 図 目 次

Fig. 1　池之谷横穴群の位置 …… 1
Fig. 2　池之谷横穴群位置図 …… 2
Fig. 3　調査位置図 …… 3
Fig. 4　4号横穴墓　調査前 …… 4
Fig. 5　A区作業風景 …… 4
Fig. 6　4号横穴墓　作業風景 …… 5
Fig. 7　整理作業 …… 5
Fig. 8　池之谷横穴群周辺の遺跡分布 …… 7
Fig. 9　池之谷横穴群周辺の調査状況 …… 9
Fig.10　池之谷横穴群周辺の横穴墓 …… 10
Fig.11　池之谷横穴群周辺の地形と調査区 …… 11
Fig.12　A区 調査前・調査後地形図 …… 12
Fig.13　1～3号横穴墓 …… 14
Fig.14　A区 出土遺物 …… 14
Fig.15　B区 調査前・調査後地形図 …… 16
Fig.16　4号横穴墓 …… 17
Fig.17　4号横穴墓　再利用時検出状況 …… 18
Fig.18　B区 出土遺物 …… 19
Fig.19　防空壕の位置 …… 20
Fig.20　防空壕の立地環境 …… 20
Fig.21　防空壕　出入口 …… 20
Fig.22　天井形態の諸相 …… 21

表 目 次

Tab. 1　周辺の調査履歴 …… 8
Tab. 2　池之谷4号横穴墓の概要 …… 15

第1章　序　論

1　調査経緯

池之谷横穴群の概要　池之谷横穴群は、静岡県菊川市高橋字中磯部に所在する古墳時代の横穴墓である。その存在は古くより知られていたが、これまで詳細な調査が実施されたことは無かった。また、名称・位置等については周辺の多くの横穴墓と同様、2000年頃までは混乱が認められる。

池之谷横穴群が立地する丘陵の南側には小笠高橋川が流れ、その微高地に集落跡がひろがる景観であったことが判明している。

開発計画の浮上　静岡県道37号掛川浜岡線は、起点を掛川市二瀬川・終点を御前崎市池新田とする経済活動・地域間交流等を担う主要道路である。一方、通行する大型車両の増加や生活交通・通過交通の混在化など、交通環境は悪化していた。そのため、静岡県では防災機能の強化・交通渋滞の緩和・歩行者を含めた安全性の向上を目的として、掛川浜岡バイパスの道路整備事業を計画した。

この道路整備事業の一環として、菊川市高橋地区では静岡県埋蔵文化財センターが記録保存のため本発掘調査を実施している。今回の調査地周辺は、菊川市の施工対象範囲内であり、開発予定地内には周知の埋蔵文化財包蔵地である池之谷横穴群と三ツ池古墳群が含まれていたことから、開発事業担当である菊川市建設経済部建設課と菊川市教育委員会社会教育課によって、遺跡の取扱いについて協議を進めていた。

2022年になり事業化に向け大きく進展したため、開発予定地における確認調査を2022年4月に実施し、遺構や遺物の残存状況の把握に努めた。その結果、三ツ池古墳群では遺跡の存在を示す資料は得られなかったが、池之谷横穴群において横穴墓が展開していることが確認された。

本発掘調査の実施　確認調査の結果を受けて、開発に伴う遺跡の取扱いについて菊川市建設経済部と菊川市教育委員会によって協議が重ねられた。その結果、道路整備事業に伴い遺跡が消滅する部分については、記録保存のための本発掘調査を実施することが取り決められた。

発掘調査は菊川市教育委員会が行い、現地調査は2022年12月から2023年5月にかけて実施した。調査面積は720㎡である。

Fig. 1　池之谷横穴群の位置

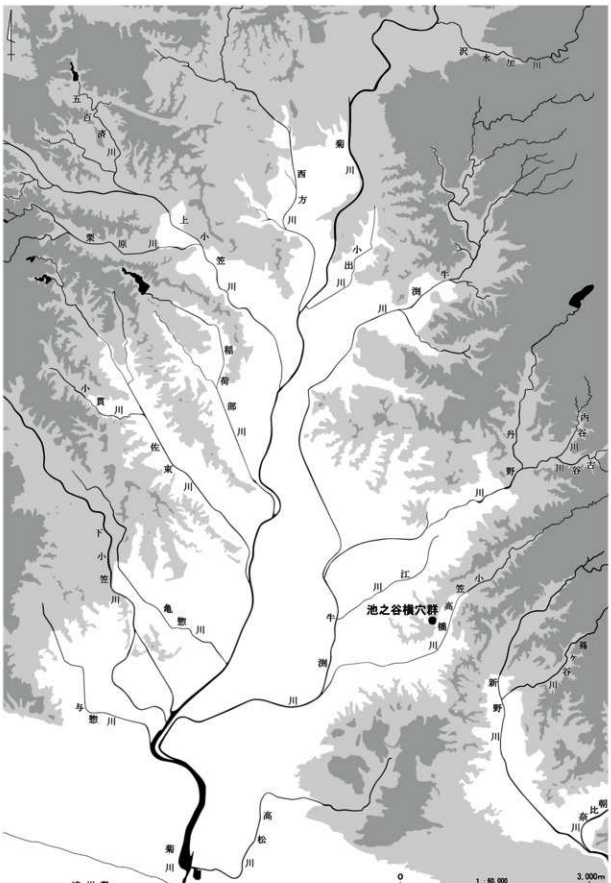

Fig. 2 池之谷横穴群位置図

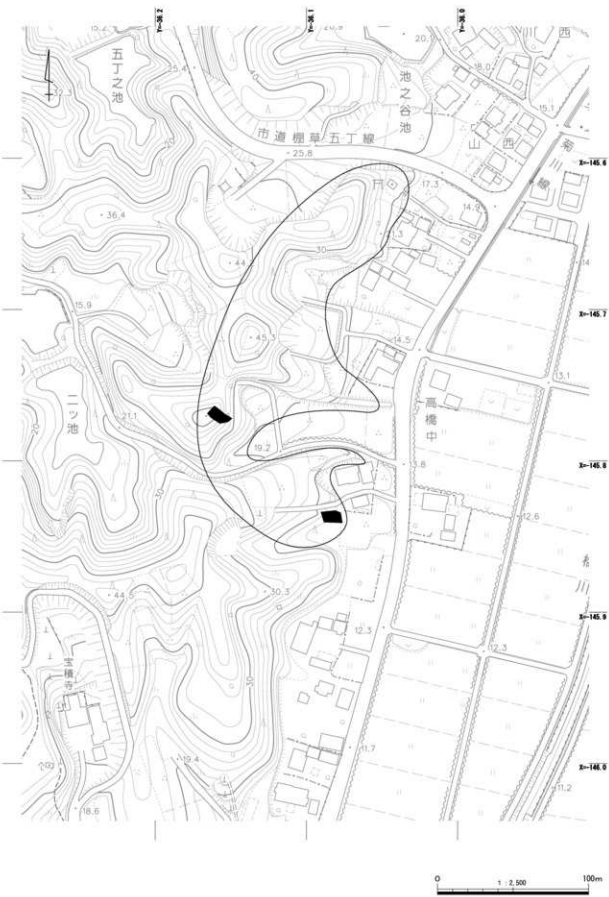

Fig. 3 調査位置図

2　本発掘調査の方法と経過

（1）調査方法

確認調査　開発予定地内の池之谷横穴群と三ツ池古墳群の確認調査は、2022 年 4 月に実施した。

三ツ池古墳群では古墳の所在が想定される箇所に試掘溝を設定し、人力による表土等除去・遺構の有無の確認を行った。その結果、開発予定地内に遺構は存在しないことが明らかとなった。

池之谷横穴群については、丘陵頂部を中心に確認調査がこれまでに行われていたため、斜面部を中心に試掘溝を設定し、横穴墓の確認を行った。また、すでに開口している横穴墓も確認できたため、この箇所の確認調査は行わず、直接本発掘調査を実施することとした。

調査区の設定　横穴墓が確認された範囲における本発掘調査対象地は、開発計画の形状と工程により 2 箇所に分かれている。調査区は先に調査を開始した南側をＡ区・北側をＢ区とした。

調査前には樹木等が密集しており測量に支障があるため、伐採した後に現況の地形測量を行った。

表土等除去　横穴墓は斜面の中腹に存在し、土砂が厚く堆積していることは確認調査で判明していた。しかし、調査対象地の立地や搬入路等の要因により重機（バックホー）を用いることが出来なかったため、表土等の除去は人力により実施した。Ｂ区は特に急斜面であり、横穴墓の開口部・前庭部はほぼ垂直に切り立っていたため、充分な安全対策を講じて調査に臨んだ。

遺構検出・精査　確認調査により横穴墓の存在が明らかとなった範囲を中心に遺構検出を行った。遺構の検出は、鋤簾を用いて人力で実施した。横穴墓内部については、移植ゴテ・竹ベラ等を用いて遺物や内部施設に留意しながら掘り下げを行った。また、横穴墓の埋葬施設内とＢ区前庭部埋土は、玉類などの微細遺物が含まれている可能性があるため、すべてをフルイにかけた。

遺構測量　前庭部や地形測量等は、トータルステーションと電子平板を使用して計測・作図した。横穴墓はデジタル写真から SfM/MVS（Structure from Motion/Multi-view Stereo）手法によって三次元データを作成し、トータルステーションで計測したデータを補完的に利用して二次元的図面を作成した。本書で掲載している 4 号横穴墓の図面は、三次元データから生成されたオルソ画像と三次元点群データを利用して作成したものである。

写真撮影　写真撮影は中判カメラ（白黒フィルム、リバーサルフィルム）を使用し、一眼レフデジタルカメラでは RAW データを取得し、色補正後 TIFF データに変換した。高所からの撮影では急傾斜地であることからローリングタワーが設置出来ないため、高所撮影用ロッドを使用して撮影した。

Fig. 4　4 号横穴墓　調査前

Fig. 5　A 区作業風景

（2）調査経過

発掘調査　発掘調査は2022年12月5日よりA区から開始した。A区全体の現況地形測量を行った後、確認調査で横穴墓の所在が判明している東半から調査に着手した。近現代頃と推定される山道が、横穴墓を横断するように開削されており、遺存状況は良好ではなかった。そのため、2023年1月12日までに横穴墓の精査・実測図作成や写真撮影などの記録類作成は終了した。A区西半は諸条件により確認調査が未着手であったため、この段階で斜面全体の表土等除去を行った。その結果、横穴墓の存在は認められなかったため、補足調査・調査資器材の撤収等を行い、1月20日にはA区の調査は完了した。

B区の調査は1月23日より開始したが、道路建設工事の進捗状況により、調査区への進入路確保には差し障りがあった。加えて、開発範囲の関係から表土等の排土を斜面下方へ搬出することが出来ず、東側に水平方向で人力により排土を搬出せざるを得なかった。そのため、尾根を横断するように新たに開削して排土置き場を設定するなど、調査の準備段階で長時間を費やした。表土等除去を本格的に開始できたのは2月中旬であったが、急斜面なうえに土砂の堆積が厚いという悪条件での作業は3月7日まで続いた。3月8日から横穴墓の調査に取組み、3月29日には横穴墓の再利用段階の調査は完了した。なお、3月27日には安全祈願を執行した。

4月4日から横穴墓構築段階の調査に着手し、4月20日には掘削・調査は完了した。その後、補足調査を実施し、横穴墓に伴うすべての埋土をフルイにかけて微細遺物の確認を行った。5月11日までに調査資機材の撤収を行い、各種台帳と図面・写真の基礎整理をして5月25日にはすべての作業を終了した。

整理作業　発掘調査中は遺物台帳・図面台帳・写真台帳を作成し、それらについて管理番号による関連付けを行い、調査所見とともに遺構台帳によって管理した。

本格的な資料整理は、2023年4月から2024年3月にかけて菊川市下平川の菊川市埋蔵文化財センターで実施した。出土品の洗浄・注記・接合・復元・実測・トレース、記録類の編集や図版作成などとともに遺物写真撮影を行った。その後、原稿執筆・報告書編集などを行い、整理作業を終了することができた。

資料の保管　出土した遺物は、菊川市埋蔵文化財センターで保管し、教育普及などのために今後活用される予定である。

また、発掘調査から報告書刊行までに発生した各種の記録類も菊川市埋蔵文化財センターにおいて保管している。

Fig. 6　4号横穴墓　作業風景

Fig. 7　整理作業

第２章　遺跡の位置と環境

１　地理的環境

菊川市は静岡県の西部でも中央寄りに位置し、北は丘陵地帯・西は小笠山丘陵・東は牧之原台地に囲まれ、その中央を南流する菊川とその支流によって沖積平野が形成されている。温暖な気候環境でもあることから、平野には水田が多く、丘陵地では緑辺の河岸段丘などを中心に茶畑が広がる。

池之谷横穴群は、牧之原台地から派生した丘陵斜面に展開している。これらの丘陵には古墳・横穴墓が多く分布しており、丘陵に挟まれるように形成された低地部中央付近を小笠高橋川が北東から南西方向に流れている。

小笠高橋川の上流には、秋葉街道（"塩の道"）の要衝・塩買坂が位置している。また、池之谷横穴群が立地する高橋地区には御前崎街道が通過しており、陸上交通の重要な地域でもあったようである。

２　歴史的環境

縄文時代　池之谷横穴群周辺の縄文時代遺跡としては、釜太夫遺跡で石器が表採されているに過ぎない。縄文時代については確認されている同時代の遺跡が少なく、様相は不明な点が多い。当地域周辺に安定した集落が営まれるようになるのは、弥生時代に入ってからと考えてよいであろう。

弥生時代　農耕社会が進展する弥生時代では、安定的な集落が営まれるようになる。菊川流域の平野部にも人々の進出が本格化する。嶺田遺跡は菊川の支流・牛渕川と丹野川が合流する付近に立地しており、東遠江の弥生時代中期中葉の土器様式・嶺田式土器は、そこから出土する土器が標識とされてきている。しかし、遺構から把握できる集落の動態は明確になっていないのが現状である。牛渕川流域では川田・東原田遺跡において、弥生時代中期～後期の集落の具体的な様相を確認できる。特に後期の大型の掘立柱建物には棟持柱をもつ建物が検出されており、その巨大な柱根が出土している。

古墳時代　当地域周辺では古墳時代前期に三角縁神獣鏡が出土した上平川大塚古墳、中期に墳長約49ｍの前方後円墳である舟久保古墳をはじめ八幡ヶ谷古墳や朝日神社古墳、後期前～中葉頃に埴輪を有する一辺約12ｍの方墳と考えられている寺の谷３号墳などの古墳が築造されている。後期には当地域において横穴墓が広く展開するが、分布は一様ではない状況も看取でき、これを地形的要因によるものとの指摘がある（菊川市2019）。

丹野川下流域の赤土政所遺跡、小笠高橋川の中山遺跡と高橋遺跡においては、集落の様相の一端が解明されている。特に高橋遺跡では、祭祀に伴う多量の土器群や有孔円盤・臼玉などの石製品が出土している。

奈良・平安時代　国家が律令制に移行し、地域支配において各地に国郡里制がしかれ、菊川流域は城飼郡に設定された。城飼郡は『倭名類聚抄』では11郷で構成されており、当地域は高橋郷に比定できるであろう。

当地域には、赤土荘や平安時代末期に笠原荘が成立していた。これらの動向を考古資料から導くことは困難であるが、木製祭祀具が出土した一反田遺跡、規格性のある掘立柱建物群が検出された赤土政所遺跡のほか、市場遺跡や太田ノ谷遺跡など９世紀以降に発展する遺跡が多く確認されている。これらは、地域の開発が飛躍的に進行していたことを示すものと捉えられるであろう。

240 上平川遺跡（散布地・集落跡）
241 大堤横穴群（横穴）
242 城向遺跡（散布地・集落跡）
243 堤城跡（城館跡）
244 堤遺跡（散布地）
245 志味堂横穴群（横穴）
247 猪森遺跡（散布地）
248 上平川大堀1号墳（古墳）
249 上平川大堀2号墳（古墳）
250 上平川政所遺跡（散布地）
251 鳴泉寺古墳（古墳）
252 八幡ヶ谷横穴群（横穴）
253 下平川八幡谷遺跡（散布地）
254 下平川八幡神社西遺跡（散布地）
255 宇洞横穴群（横穴）
256 好運寺山古墳（古墳）
257 東前横穴群（横穴）
259 櫛草横穴群（横穴）
260 奥之谷横穴群（横穴）
261 基谷横穴群（横穴）
262 北之谷遺跡（集落跡）
263 櫛草城跡（城館跡）
264 殿之谷横穴群（横穴）
265 猿渡横穴群（横穴）
275 宮司遺跡（散布地）
276 黒田代官屋敷跡（城館跡）
277 東猿田遺跡（散布地・集落跡）
278 下平川六反田遺跡（散布地）
280 川田・東原田遺跡（集落跡）
281 明日神社古墳（古墳）
282 猿田遺跡（散布地）
283 赤土政所遺跡（散布地）
284 春日神社古墳（古墳）
285 春日山横穴群（横穴）
286 釜太夫横穴群（横穴）
287 釜太夫遺跡（散布地）
288 赤土上ノ段遺跡（散布地）
289 赤土西反田遺跡（散布地）
290 八丁遺跡（散布地）
291 櫃田遺跡（散布地）
292 宮の前遺跡（散布地・集落跡）
293 宮下古墳群（古墳）
294 川上城跡（城館跡）
295 代之谷古墳（古墳）
296 作兵衛屋敷墓地遺跡（その他の墓）
297 宮下横穴群（横穴）
298 舟久保古墳（古墳）
299 太田ノ谷遺跡（散布地・集落跡）
300 市場遺跡（集落跡）
306 前岡横穴群（横穴）
308 南山遺跡群（横穴・城館跡）
310 高橋遺跡（集落跡）
312 虚空蔵横穴群（横穴）
315 三ツ塚古墳群（古墳）
317 地蔵堂横穴群（横穴）
318 寺の谷横穴群（横穴）
319 池之谷横穴群（横穴）
320 寺の谷古墳群（古墳）
322 櫃田遺跡群（散布地・横穴）
323 天ヶ谷古墳（古墳）
324 高橋城跡（城館跡）
325 佐原谷横穴群（横穴）
326 佐原谷遺跡（散布地）
329 種原遺跡（散布地）
330 八幡ヶ谷古墳（古墳）
331 志味堂古墳群（古墳）
332 一反田遺跡（散布地）
333 鳴泉寺１号墳（古墳）
334 大堤古墳群（古墳）
335 池之谷遺跡（散布地）
336 中山遺跡（集落跡）
337 坊之谷古墳（古墳）
338 好運寺山横穴（横穴）
339 坊之谷横穴（横穴）

（番号は環境文化財包蔵地の遺跡番号）

Fig. 8　池之谷横穴群周辺の遺跡分布

３　既往の横穴墓調査

池之谷横穴群周辺は、埋葬施設として横穴式石室よりも横穴墓が広く展開する地域である。丹野川以南の横穴墓分布を俯瞰すると、江川流域と小笠高橋川流域に大きく区分できる。ここでは発掘調査が実施されたものを中心に、各横穴墓群の概観を記してみよう。

寺の谷横穴群　約 30 基存在していたと考えられているが、茶園造成の結果、19 基が遺存していた。過去には「八丁田横穴群」・「地蔵堂横穴群」・「五丁横穴群」とも呼ばれ、混同と誤認があったようである。1982 年に静岡県教育委員会により 13 ～ 16 号横穴墓が調査され（静岡県教委 1983）、出土遺物から７世紀前半～中頃に構築されたものと考えられる。この４基以外に年代を示す資料は得られていないが、多くの横穴墓は７世紀前半～中頃を主体とした時期に帰属するものと推察される。

虚空蔵横穴群　古くは「虚空蔵堂横穴群」・「虚空蔵横穴群」・「池ヶ谷横穴群」と個別の横穴群とされてきたが、丘陵から北西方向に派生する小丘陵に築かれた一連の横穴群として現在は認識されている。このうち、「池ヶ谷横穴群」として３基が調査され、７世紀後半頃に構築されたと考えられている（小笠町 1984）。一方、横穴墓の基数や分布など基礎的資料が蓄積されておらず、その様相は判然としない。

江川流域の横穴群　江川左岸には宮下横穴群や地蔵堂横穴群が分布している。いずれも２基程度の小規模な横穴墓とみられる。

南山遺跡群　小笠高橋川右岸の丘陵先端部に立地する。「高橋横穴墓群」・「高根山横穴群」・「平組横穴群」と名称等が混乱していたが、現在では南山遺跡群として登録・管理している。横穴墓は５群 30 基ほどで構成しているものと考えられているが、実態は判然としない。一部、開口している横穴墓が実測されており、形態・時期の一端が判明している（菊川町 1983）。

前岡横穴群　従来は「高根山横穴Ｅ群」とされてきた横穴群である。南山横穴群の西側に位置しており、浅草観音堂付近の開口する横穴墓には現在でも観音像が祀られている。７世紀前半～中頃に構築されたものと捉えられているが、詳細は不明なものが多い。

坊之谷横穴　小笠高橋川左岸の丘陵先端部に立地しており、横穴墓が群を形成せず単独で存在する点が特徴である。玄室は平面円形、天井はドーム形を呈する。出土遺物から８世紀の埋葬が把握でき、横穴墓としては終末期に構築された可能性が指摘されている（菊川市 2019）。

小笠高橋川流域の横穴群　小笠高橋川左岸では、橿田遺跡群・佐栗谷横穴群・西村横穴群などが点在している。橿田遺跡群や佐栗谷横穴群は２基程度の小規模な横穴墓とされている。西村横穴群の内容は明らかではないが、立地を勘案すれば他の横穴墓と同様に小規模なものと推察できよう。

Tab. 1　周辺の調査履歴

遺跡・古墳・横穴墓	地区	調査年	調査主体	主な時代	文献
寺の谷３号墳	川上	1972	小笠町教委	古墳	小笠町教委 1991
舟久保古墳	川上	1975	静岡県教委	古墳	静岡県教委 1977
寺の谷横穴群	川上	1981・1982	静岡県教委	古墳	静岡県教委 1983
赤土政所遺跡	赤土	2005	菊川市教委	古墳・中世	菊川市教委 2006
赤土政所遺跡	赤土	2008 ～ 2013	静岡県埋文	古墳・奈良・平安・中世・近世	静岡県埋文 2016
一反田遺跡	赤土	2008 ～ 2013	静岡県埋文	弥生・古墳・奈良・平安	静岡県埋文 2016
池ヶ谷横穴群	高橋	1983	小笠町教委	古墳	小笠町教委 1984
虚空蔵横穴群	高橋	2013	菊川市教委	古墳	菊川市教委 2014
池之谷遺跡	高橋	2013・2014	静岡県埋文	弥生	静岡県埋文 2020
中山遺跡	高橋	2014 ～ 2017	静岡県埋文	奈良・平安・中世・近世	静岡県埋文 2020
高橋遺跡	高橋	2015 ～ 2017	静岡県埋文	弥生・古墳・奈良・平安・中世	静岡県埋文 2020
坊之谷古墳群、横穴	高橋	2017	菊川市教委	古墳・奈良・中世	菊川市教委 2019

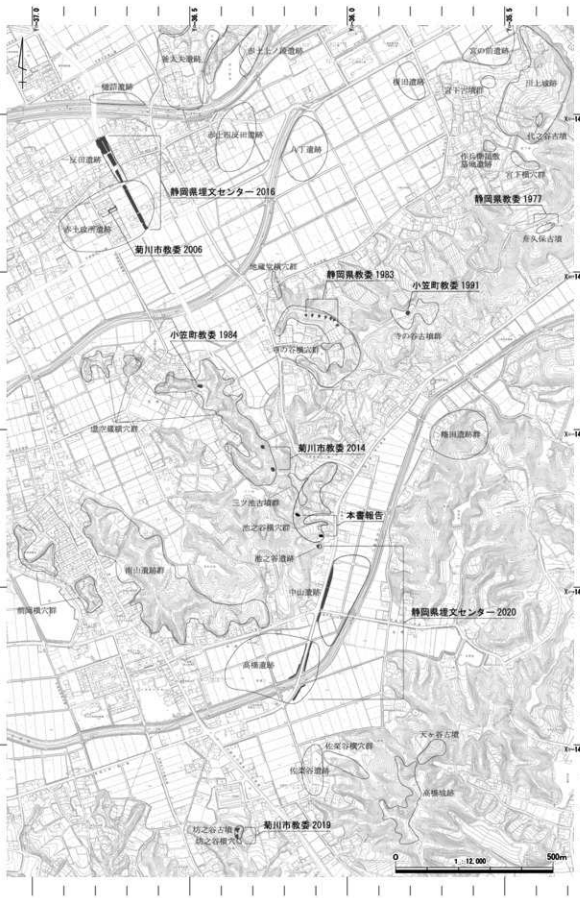

Fig. 9　池之谷横穴群周辺の調査状況

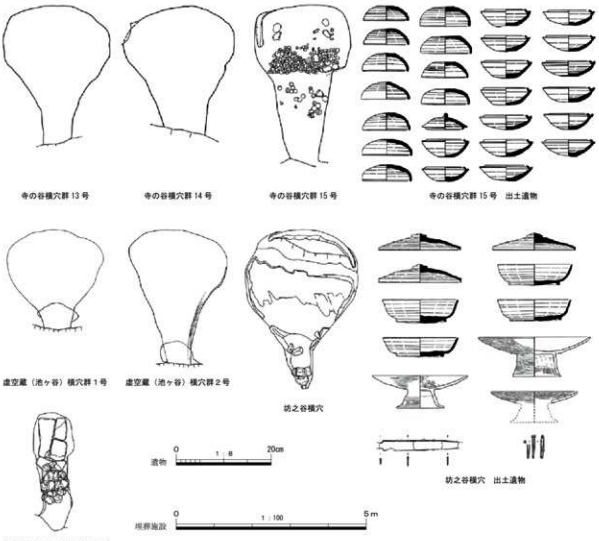

Fig.10　池之谷横穴群周辺の横穴墓

【文　献】

小笠町教育委員会 1984『池ヶ谷横穴群』
小笠町教育委員会 1990『宮ノ前遺跡発掘調査報告書』
小笠町教育委員会 1991『寺の谷３号墳発掘調査報告書』
菊川町教育委員会 1983『大淵ヶ谷　篠ヶ谷　西宮浦』
菊川市教育委員会 2006『赤土政所遺跡発掘調査報告書』
菊川市教育委員会 2014『虚空蔵横穴群発掘調査報告書』
菊川市教育委員会 2019『坊之谷古墳群・坊之谷横穴発掘調査報告書』
静岡県教育委員会 1977『静岡県埋蔵文化財調査報告』
静岡県教育委員会 1983『遠江の横穴群』
静岡県埋蔵文化財センター 2016『赤土政所遺跡・一反田遺跡』
静岡県埋蔵文化財センター 2020『池之谷遺跡・中山遺跡・高橋遺跡』

第３章　調査成果

１　調査対象地の概観

地　形（Fig.11）　池之谷横穴群は、牧之原台地西縁から派生した丘陵斜面に位置している。この丘陵は東側を流れる小笠高橋川に向かい、いくつもの小丘陵を形成している。今回の調査では、南側小丘陵の調査区をＡ区・北側小支谷の谷奥部分の調査区をＢ区として設定した。

Ａ区の横穴墓は、小丘陵南側斜面先端の狭い範囲に構築されている点を特徴としている。これより西側に横穴墓が分布していないのは、横穴墓から小笠高橋川流域の平野をのぞむ際に南側の小丘陵により視界が遮られることが要因となる可能性があるだろう。

Ｂ区は谷の奥まった箇所に位置しており極めて急な傾斜であるが、横穴墓の前庭部周辺のみ傾斜が緩やかとなる。また、横穴墓の東側は小さな尾根状となることから、築造にあたっては地形の改変・掘削が及んだものと推察できる。

検出遺構の概観（Fig.12・15）　調査対象地において確認できた遺構は、Ａ区では横穴墓３基（１～３号横穴墓）・Ｂ区では横穴墓１基（４号横穴墓）である。

１～３号横穴墓は、小さな丘陵の南側斜面に開削された支群である。３基の横穴墓は、尾根頂部より約３～４ｍ下・低地部分より約２～３ｍ上の標高約 17 ～ 18 ｍ付近に築造されている。いずれも山道の開削により大きな影響を受けた結果、玄室床面・奥壁などの一部が残存するのみである。

４号横穴墓は調査前より開口していたが、天井部まで良好に遺存していた。前庭も良好に検出され、形態から４号横穴墓単独の前庭とみられる。近世以降、再利用のため埋葬施設床面が改変されている。

また、Ｂ区東側の調査対象地外において、太平洋戦争末期の防空壕を１基確認した。

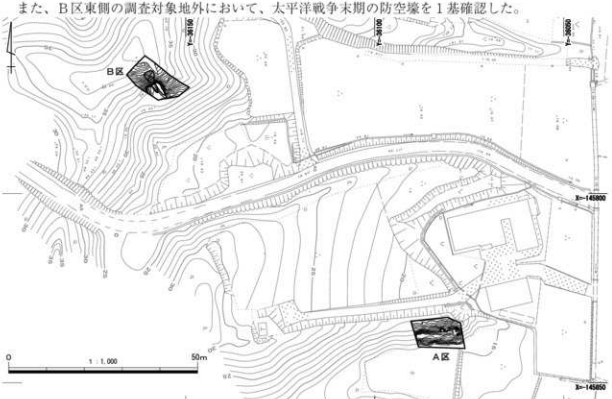

Fig.11　池之谷横穴群周辺の地形と調査区

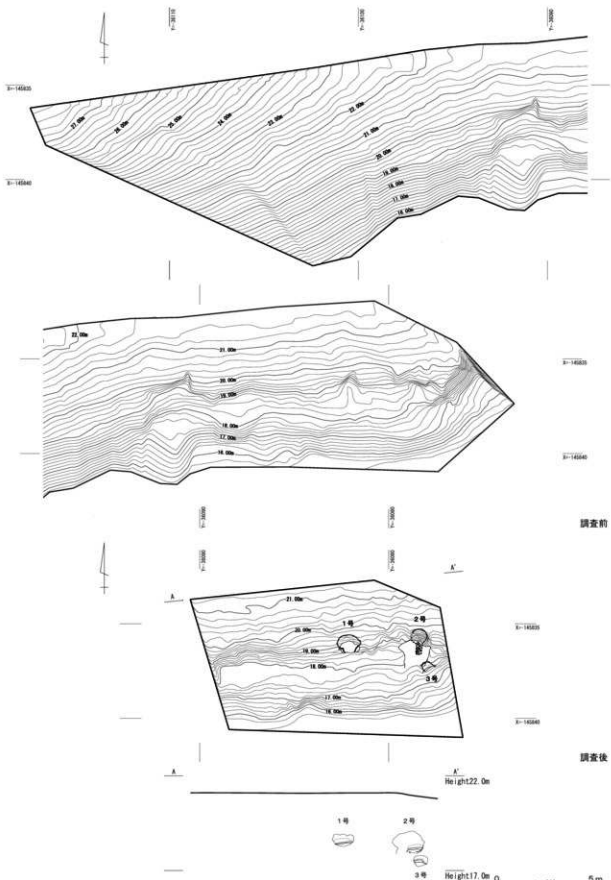

Fig.12　A区 調査前・調査後地形図

2　1～3号横穴墓

（1）1号横穴墓

立地及び調査前の状況　(Fig.12)　調査区中央部に位置しており、2号横穴墓が東側に存在する。床面の標高は約 18.3 mである。調査前の段階で山道開削により羨道が失われ、天井部も殆ど崩落していた。したがって、開口・未開口の状況については判然としない。

横穴墓の構造　(Fig.13)　横穴墓を構成する羨道・前庭等の諸属性は消失し、無袖の玄室のみが遺存する。玄室平面形は横長楕円形であり、玄室長約 0.95 m・最大幅約 1.2 mの規模である。残存する奥壁の高さは約0.4 mである。天井形態は不明である。床面は風化が顕著であり、本来はほぼ水平であったものと推測される。また、壁面の掘削痕も風化の影響により確認できなかった。

遺体の埋葬を行うために設ける敷石や棺台などの内部施設は確認できない。玄室の規模から、本来存在していなかった可能性が高い。

築造時期　出土遺物が全くみられないことから、1号横穴墓の築造時期を明確に示すことはできない。想定の域を出ないが、玄室規模と8世紀第1～第2四半期（前葉）頃の須恵器・有台坏身が周辺から採集されていることから、1号横穴墓の築造時期も同様に捉えておきたい。

（2）2号横穴墓

立地及び調査前の状況　(Fig.12)　調査区東部に位置しており、1号横穴墓の東側・3号横穴墓の北側に存在する。床面の標高は約 18.0 mである。調査前の段階で山道の開削により横穴墓を構成する諸属性は失われていた。一方、下部の閉塞石が遺存していることから、未開口のまま開削された可能性がある。

横穴墓の構造　(Fig.13)　玄室床面の一部が遺存しており、平面形は長軸 0.8 m・短軸 0.7 mのやや楕円形を呈するものと考えられる。奥壁の一部が残るのみであり、高さや天井形態は不明である。床面はほぼ水平、掘削痕は残存する壁面からは観察不可能であった。

内部施設は確認できないが、本来より設置されなかった可能性がある。

下部の閉塞石と認められる範囲を羨道とすると、羨道長約 0.7 m・幅約 0.3 mと推定される。閉塞は直径約 0.2 mの河原石を用いて実施している。

築造時期　遺物は全く出土しなかったことから、2号横穴墓の築造時期を明確に示すことは難しい。1号横穴墓の築造時期と同様、不明確ながら8世紀第1～第2四半期頃としておきたい。

（3）3号横穴墓

立地及び調査前の状況　(Fig.12)　調査区東部に位置し、2号横穴墓の南側下位に存在する。床面の標高は約 17.3 mである。調査前の段階で山道の開削により横穴墓を構成する諸属性の多くは失われていた。

1・2号横穴墓とは異なり、主軸方位は南東方向を採用している。

横穴墓の構造　(Fig.13)　横穴墓の諸属性は消失しており、玄室残存長約 0.4 m・幅 0.5 mである。玄室平面形は縦長長方形であったと想定される。奥壁の高さ約 0.3 m、天井形態は不明である。床面は風化が顕著であり、本来はほぼ水平であったものと推測される。また、壁面の掘削痕は確認できない。

玄室の規模から勘案して、内部施設は存在していなかった可能性が高い。

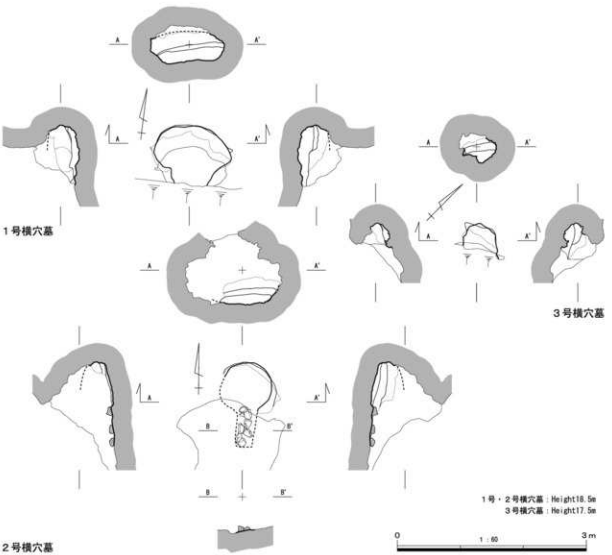

Fig.13　１～３号横穴墓

築造時期　３号横穴墓の築造時期は、出土遺物が皆無であるため不明確である。２号横穴墓との位置を考慮すると、２号横穴墓を避けているともみられるので、３号横穴墓は２号横穴墓より後に築造されたともいえる。しかし、明確な根拠とは言い難いことから、８世紀第１～第２四半期頃の築造と暫定的に位置付けておきたい。

（４）A区出土遺物

遺物の出土状況　３基の横穴墓からは出土遺物に恵まれなかったが、A区南側平坦地の表土中より須恵器片が採集されている。これらは場所的に山道開削時の土砂に紛れ込んだものと想定できるが、具体的にどの横穴墓に伴うものかは確定できない。

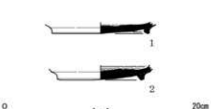

Fig.14　A区 出土遺物

出土遺物　(Fig.14)　採集された須恵器は２点とも有台坏身の底部付近である。底部は丸味をもつが高台よりも下に張り出すことはなく、弱く屈曲して口縁部へと続くものと考えられる。これらは概ね遠江須恵器編年Ⅴ－２期（８世紀第１～第２四半期前葉頃）と位置付けることが可能であろう。明確な根拠とはならないが、横穴墓の築造時期の一端を示すものと評価しておきたい。

３　４号横穴墓

（１）立地と前庭構造

立　地　（Fig.11）　池之谷４号横穴墓は、南北の小丘陵に挟まれた谷奥南側斜面に開削されている。池之谷横穴墓群の中央部やや南側に存在しており、池之谷１～３号横穴墓のＡ地区は南東方向約 100 mに位置する。４号横穴墓は、尾根頂部より約 6.5 m下・低地部分より約 13 m上の標高約 32 m付近に築造されている。

調査前の状況　（Fig.15）　４号横穴墓は早くからその存在が認知されていた横穴墓である。

４号横穴墓は、今回の調査前よりすでに開口しており、内部には大きな空洞が確認できた。一方、横穴墓入口付近から前庭は丘陵斜面からの崩落土が厚く堆積していた。後述するが、横穴墓内部は後世の改変を大きく受けていたことが判明した。

前庭構造　（Fig.16）　前庭は南東側斜面をコ字形に大きく掘削しているため、東側は基盤層が露出して小さな尾根状を呈する。西側は調査区外となるが、形態から４号横穴墓単独の前庭とみて差し支えない。現状で前庭長約 4.65 m・前庭幅約 3.6 mであるが、南側は急斜面となるため調査区内で検出された規模に大きな変更はないであろう。前庭の掘り込みは少なくとも標高 33 m付近から行われたものと考えられる。前庭東側は平坦部から急な斜面を有しながら床面となるが、西側は角度を変えながら床面に達する。前庭の床面は概ね平坦であり、南側へ緩やかに下り傾斜となる。横穴墓前面に浅く小規模な溝状の掘り込みが検出されたが、墓道など明確な機能を有するものではなく前庭東側斜面と一連の造作であろう。羨道床面から前庭床面へは、比高差約 0.2 mの緩やかな下り傾斜となる。

（２）埋葬施設

全体構造　（Fig.16）　横穴墓は、玄室と羨道が袖部で区分する両袖式であり、天井部までの構造を良好に検出することができた。主軸方位はＮ－ 21°－Ｗ、全長約 3.7 mである。構築からの過程については、古墳時代終末期の埋葬、近世後期～近代にかけての再利用といった段階を把握することができる。

Tab.2　池之谷４号横穴墓の概要

全長	3.71 m	羨道長	1.71 m
玄室長	2.00 m	羨道最大幅	1.83 m
玄室最大幅	2.52 m	羨道玄門側幅	1.83 m
玄室奥壁側幅	2.30 m	羨道開口部側幅	0.80 m
玄室玄門側幅	2.13 m	羨道玄門側天井高	1.43 m
玄室天井高	1.84 m	羨道開口部天井高	1.13 m
主軸方位	Ｎ－ 21°－Ｗ		

玄　室　（Fig.16）　玄室は主軸長約 2.0 m・最大幅約 2.5 m、中央部はやや膨らむがほぼ方形を呈する。袖部は側壁から鈍角に屈曲し、0.3 mほど側壁からやや弱く突出する。床面は丘陵基盤層である泥岩層の節理に応じた凹凸が目立つが、概ね平坦であったものと推測される。奥壁側から開口部に向かって緩やかに傾斜している。

壁体は床面四隅から天井部にかけて明瞭な稜線が確認できるため、奥壁・両側壁を明確に区分している。前壁は主軸断面では鮮明ではないが、両袖部と玄門部の稜線・掘削痕により判明する。奥壁・両側面は床面より高さ 1.0 m前後までは急傾斜で立ち上がるが、天井頂部に向けて内彎していく。主軸断面・主軸直交断面ともにドーム形を呈するが、天井高は約 1.8 mであり、ドーム形態のなかでも高さを有する天井構造と評価できる。天井頂部から次第に低く傾斜し、玄門側では約 0.4 mの高低差がある。

内部施設は確認できない。近世以降に再利用されているため、本来より存在していなかったかは不明確である。

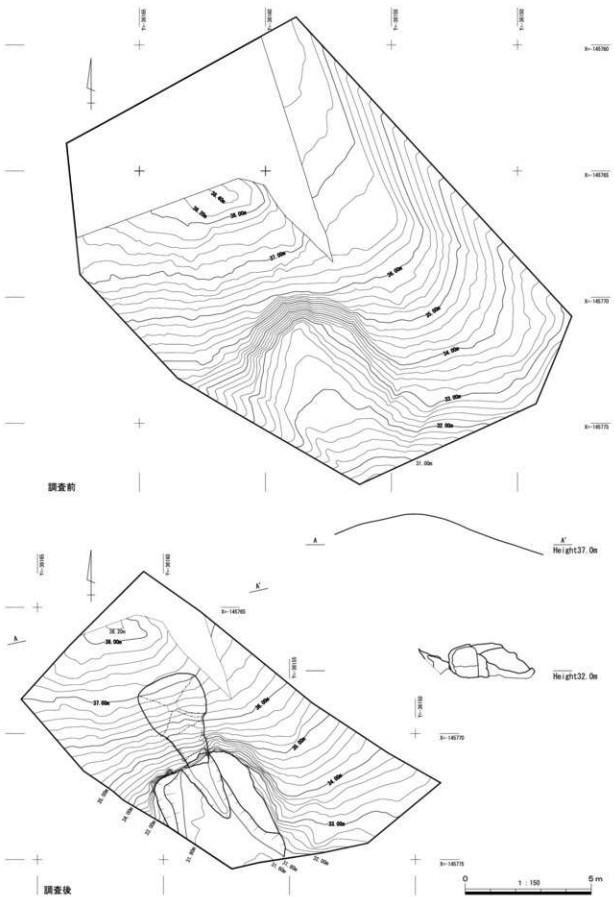

Fig.15　B区 調査前・調査後地形図

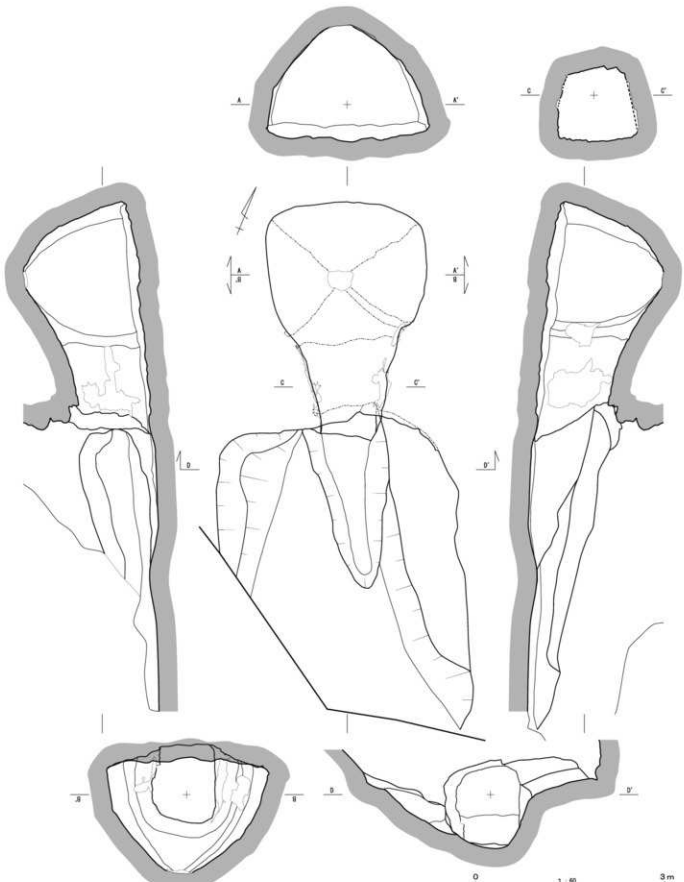

Fig.16　4号横穴墓

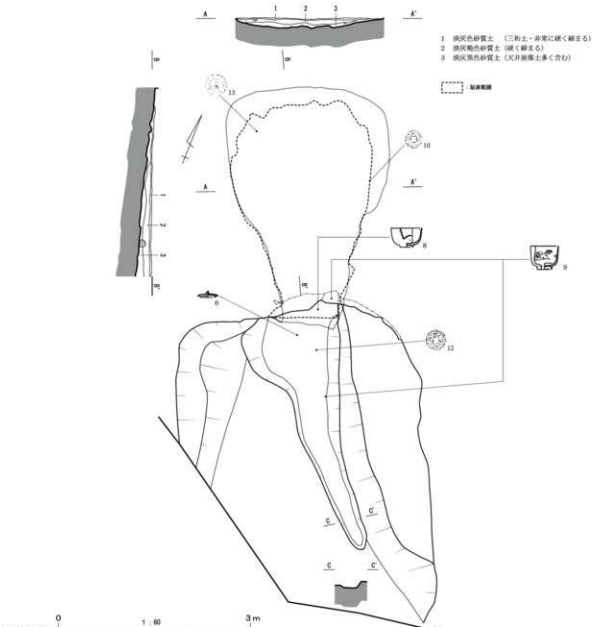

Fig.17　４号横穴墓　再利用時検出状況

羨　道（Fig.16）　羨道と玄室の間に段差はない。羨道は玄室のほぼ中央に取り付けられる。羨道の平面形は、玄門側が広く開口部側が狭いやや縦長の逆台形である。玄室長と羨道長では、玄室が約0.3 m長い。主軸に直交する断面は台形を呈し、天井部は開口部に向けて低くなり開口部側とは約 0.3 mの高低差がある。右側壁は開口部付近でやや広がっている。

閉　塞　閉塞施設は完全に失われており不明であるが、再利用された前庭には円礫が散乱して出土している。また、開口部付近に板を嵌めたような痕跡は確認できないことから、円礫積み閉塞であったと推測される。

掘削痕　壁面には掘削痕（最終調整痕）が比較的明瞭に観察でき、天井から床面まで縦方向に削り取られている。天井部が高いことから、数回に分けて縦方向に調整を行った可能性が高い。

調整痕は幅 0.1 m前後が多く、断面はレンズ状であることから、U字形の刃先をもつ鋤先や手斧などで最終壁面調整が行われた可能性が高い。

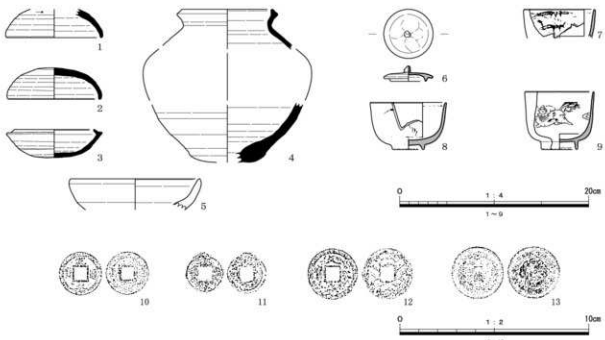

Fig.18　B区 出土遺物

横穴墓の再利用　（Fig.17）　埋葬施設の床面は丘陵斜面からの灰黄褐色砂質土に覆われており、これを掘り下げると三和土が検出された。三和土は一部確認できない範囲があるが、本来は全面に敷設したものと考えられる。敷設に際しての手順は、天井部などが崩落したのを整地土を埋めて均した後に三和土で仕上げたものと復元できる。壁面は羨道右側壁に水平方向の抉り込みが認められる他は、改変された痕跡は確認できない。前庭床面の非常に浅い不整形な溝状遺構は、再利用された横穴墓への出入りで自然と窪んだ痕跡と捉えられる。

（3）出土遺物

遺物の出土状況　（Fig.17）　再利用段階の前庭から1・2・4～6・12、三和土直上から10・11・13、三和土下層から3・7～9が出土している。古墳時代の遺物は当時の位置を留めているものはなく、横穴墓内に小破片として遺存したものが再利用の造作をする際に埋没したものであろう。

これらの状況から江戸時代以前には閉塞が壊されて盗掘をうけて開口し、その後に三和土を施して近代まで再利用された変遷を辿ることができる。

出土遺物　（Fig.18）　1～5は古墳時代の土器であり、1～4は須恵器・5は土師器である。1・2は坏蓋である。口径10cm前後で、天井部の丸味が強い。3は坏身であり、口縁部の立ち上がりは短く内傾している。4は広口壺であり、底部外面には直線からなるヘラ記号がみられる。5は坏であり、やや浅い半球形を呈するものとみられる。

6～13は近世以降の遺物である。銭貨は4点図示した。10と11は寛永通宝・12は文久永宝・13は明治十六年銘の一銭硬貨である。この他、鉄銭も3点出土している。

（4）築造時期

出土した須恵器は遠江Ⅳ期前半に位置付けられ、7世紀前半～中頃に築造されたと捉えられる。玄室四隅からの稜線が強い点、前庭が開口部からひろがる点などの横穴墓の形態的特徴も周辺の調査成果と年代的に矛盾しない。

4　太平洋戦争期の遺構

防空壕　（Fig.19 ～ 21）　太平洋戦争末期に掘削された防空壕が、調査対象地外のＢ区東側に遺存していた。道路整備事業に伴い消滅するため、ここで報告する。

防空壕は日本本土空襲に伴う航空爆弾の破片や爆風などの危害を避けるための応急的退避設備である。丘陵裾部に立地し、等高線に直交するように掘削されている。入口部分は丘陵斜面からの崩落土で埋没していたが、防空壕内部には流入していなかった。しかし、防空壕は崩落する危険性が高いと判断したため､内部の精査は実施していない。安全を最優先とする観点から､防空壕内部は撮影用ロッドを使用した写真撮影で状況を確認するなどの最低限の記録化を実施するに留めた。

防空壕は全長約 3.7 m・幅約 0.6 m、内部の平面形状は奥寄りで左右に小規模な部屋状空間を設ける「十」字形を呈する。天井部は高さ約 1.0 mのアーチ状である。

出土遺物　内部を精査していないため、戦争時と直接的に結び付けられる遺物は得られていない。

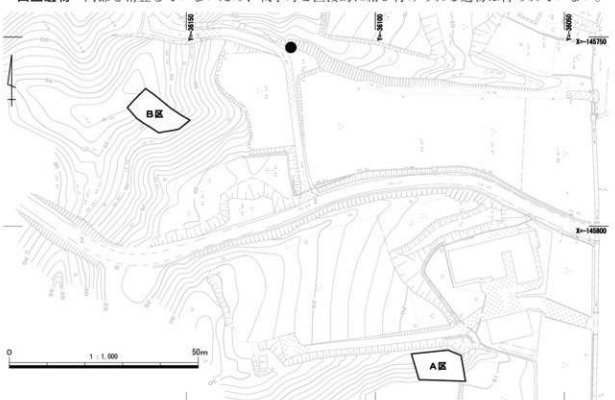

Fig.19　防空壕の位置

Fig.20　防空壕の立地環境

Fig.21　防空壕　出入口

第４章　総　括

発掘調査の成果　今回の調査では、横穴墓を４基検出した。１～３号横穴墓は出土遺物に恵まれなかったが、周辺から採集された須恵器を山道開削時に紛れ込んだものと捉えれば、築造時期は概ね遠江須恵器編年Ⅴ期前半（初頭）（７世紀末葉～８世紀第１四半期頃）と想定できよう。規模等を勘案すれば、横穴墓が次第に終焉していく際の一つの形態を示しているものとみられる。

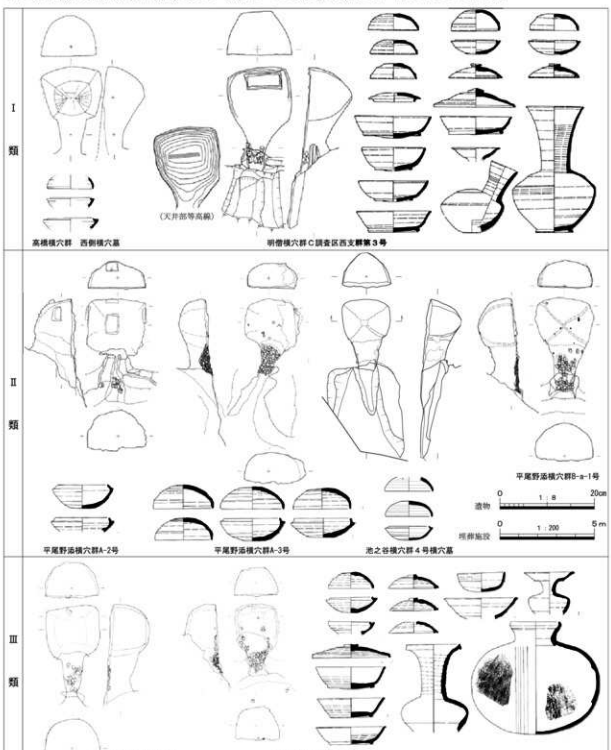

Fig.22　天井形態の諸相

4号横穴墓は、玄室・羨道の埋葬施設が天井部まで遺存しており、前庭も良好に検出できた。平面形態は両袖式であり、玄室平面はほぼ方形を呈する。主軸断面・主軸直交断面ともにドーム形に大きく分類されるが、菊川流域でみられる一般的な天井・断面形態とはやや異なる。近世以降に再利用されているため、敷石や棺台などの内部施設は不明確である。遠江須恵器編年Ⅳ期前半に位置付けられる遺物が出土しており、築造時期は7世紀前半～中頃と捉えられる。

特記事項　横穴墓の天井部はすでに崩落している事例が多いが、4号横穴墓は良好に遺存していたことから、横穴墓の構造的特質をうかがうことができる資料を得た。ここでは特に、横穴墓の天井形態について概観してみよう。

菊川流域における横穴墓の天井形態は、従来よりドーム形と指摘されている（鬼澤2001、松井2001）。一方、4号横穴墓は玄室床面四隅から天井部にかけて明瞭な稜線が特徴であることから、この稜線に着目すると当地域で普遍的な天井形態とは異なる様相を見出すことができる。その状況は、7世紀代を中心として以下のように類型化が可能であろう。

Ⅰ類：家形天井構造を採用するもの

Ⅱ類：壁面は急傾斜で立ち上がり、天井頂部に向けて内湾しながら収束していくもの

Ⅲ類：天井部がやや平坦なため、横断面が台形を呈するもの

これらは6世紀後半から7世紀にかけて爆発的に築造された横穴墓の極めて多様な形態のうち、直線化を志向する構築技術的変遷のなかで理解されるが、Ⅰ類は被葬者の職掌・出自の反映や葬送儀礼が内包する意匠などと捉えることは可能であろう。その背景や要因について分析し具体像を示すことは難しいが、今後の調査資料の増加や詳細測量の追加を待って、さらなる検討が必要であろう。

今後の展望　本書で報告した池之谷横穴群の調査成果は、菊川流域に展開する古墳時代後期から奈良時代の横穴墓にかかわる情報をもたらした。菊川中流域の横穴墓は、その分布域に比較して部分的な地点に限ってこれまで調査が実施されてきた。したがって、現状保存される部分が多くあり、今後の詳細測量を含めた調査の進展により、横穴墓の具体的様相が解明されていくことが期待される。

一方、今回の調査では横穴墓の構造的特質について一部を示したにとどまり、副葬品だけでなく横穴式石室などの古墳との関連性については着手できなかった。また、菊川流域における歴史的位置付けなど、さらに追及すべき課題は多い。今後の資料の蓄積を期待するとともに、池之谷横穴群の調査成果が地域史を語る資料として活用されることを願いたい。

【謝　辞】

本書の作成にあたり、大谷宏治氏・鈴木敏則氏に多くのご教示を得た。心より感謝申し上げます。

【参考文献】

鬼澤勝人2001「菊川水系地域の横穴墓」『東海の横穴墓』静岡県考古学会

静岡県考古学会2001『東海の横穴墓』

松井一明2001「遠江における横穴墓の伝播と展開」『静岡県考古学研究33号』静岡県考古学会

【発掘調査報告書】

菊川町教育委員会1983『大淵ヶ谷　篠ヶ谷　西宮浦』

静岡県教育委員会1983『遠江の横穴群』

静岡県埋蔵文化財調査研究所1992『平尾野添横穴群』

大東町教育委員会1995『明僧横穴群発掘調査報告書』

図　版
PLATE

1　A区調査前全景（南東から）

2　B区調査前全景（東から）

1　A区全景（南東から）

2　1号横穴墓（南から）

3　3号横穴墓（南東から）

4　2号横穴墓（南から）

1　4号横穴墓　全景（南東から）

2　4号横穴墓　全景（南から）

3　4号横穴墓　開口部（南東から）

1　4号横穴墓　奥壁（南東から）

2　4号横穴墓　前壁（奥壁側から）

3　4号横穴墓　左袖部（奥壁側から）

4　4号横穴墓　右袖部（奥壁側から）

4 号横穴墓展開図

1　4号横穴墓　出土遺物（1）

2　4号横穴墓　出土遺物（2）

報 告 書 抄 録

ふりがな	いけのやよこあなぐん１じはっくつちょうさほうこくしょ
書　名	池之谷横穴群１次発掘調査報告書
副書名	
巻　次	
シリーズ名	菊川市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 26 集
編著者名	丸杉俊一郎
編集機関	菊川市教育委員会
所在地	〒 437 － 1514　静岡県菊川市下平川 6225 TEL　0537 － 73 － 1137
発行年月日	2024 年 3 月 1 日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
				世界測地系				
池之谷 横穴群	静岡県 菊川市 高橋	22224	319	34° 41′ 18″	138° 6′ 8″	20221205 ～ 20230525	720㎡	市道赤土高橋線道路整備事業に伴う事前調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
池之谷横穴群	横　穴	古墳後期～奈良	横穴墓４基	土師器・須恵器	

要　約

池之谷横穴群は、小笠高橋川北岸の丘陵に展開する横穴墓群である。

調査対象地において、A区３基・B区１基の横穴墓を確認した。A区で検出された３基の横穴墓は、山道の開削により玄室床面・奥壁などの一部が残存するのみであった。出土遺物から８世紀に位置付けられる可能性を指摘できる。

B区で検出された横穴墓は、玄室・羨道の埋葬施設が天井部まで遺存しており、前庭も良好に検出できた。出土遺物から７世紀前半～中頃に築造されたと捉えられるが、近世以降に再利用されている。

菊川市埋蔵文化財調査報告書　第26集

池之谷横穴群１次
発掘調査報告書

令和６年３月１日

編集・発行　静岡県菊川市教育委員会
〒437-1514　静岡県菊川市下平川6225
TEL（0537）73-1137

印　刷　所　株式会社ケイ・アート
〒438-0071　静岡県磐田市今之浦2-3-16
TEL（0538）36-8568